

平成二十七年七月一日発行 第二十五巻第七号 通巻第一八九号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成27年7月号

岡井省二創刊



栄螺

高橋将夫

並例直列になり鳥雲に

鶴引けば帰ってきたるつばくらめ

恋の火も野火も自づと鎮まりぬ

言ふこととすること違ふ春秋



質問に訝の答ふ万愚節
日本産買ふも建国記念の日
風神の袋の中の春の風
ひしひしと大気の重さ糸柳
葉桜となりて輝き失なはず
春惜しむ場所にはあらず壇ノ浦
ほろにがい記憶栄螺が焼きあがる



槐安集

水野恒彦

崑崙へ遠き目差し鶴歸る
まほろばの木霊飛びかふ花の山
遠くに妣か白山吹遠くにか
山頭火踏みゆきし道亀鳴けり
焼蛤海の記憶を吐き出せり

加藤みき

墓のこゑを聞かむと集まりぬ
ビスケットの匂ひの茅花流しかな
百千鳥談所ヶ森のしじまかな
飛花落花いづれ天空にてあはむ
男の子たち五月病などふつとばせ



中島陽華

面白の弥山の空の初音かな
唇は葉つばのかたち雛あられ
横向きにパイヤ実る常楽会
子に曳かれまた見えたし滝櫻
映写機がカラカラ回り春深む

竹内悦子

花衣脱ぎ捨ててある行基の湯
八重櫻咲き初むさぬきうどんかな
桜咲く藁屋の牛に啼かれける
水にのる花びら関雪櫻かな
拝啓も草々もなく竹の子来

雨村敏子

雲ひとつなく白梅の明けにけり
亀鳴くと言へばそこいら星の渦
色鉛筆転がり春を追ひかける
金平糖和紙にくるんで雛の客
朧夜や丸盆ひとつありにける

本多俊子

春落葉からころから誰を追ふ
桃咲いて男やさしくなりにけり
葬送の真白き空に鳥帰る
花みづき咲き妖精の飛び立ちぬ
彼方には戦たたかひのありさくら貝

近藤喜子

妖精の翅ひらひらと風光る
宇宙よりも深き目差し孕み鹿
山霊に囁く藤の花の揺れ
ときめきを永遠に秘めをり桜貝
おぼろなる優しさ虚実つつみ込む

瀬川公馨

莖立やぐるり黄金のアルペジオ
掌の湿りてゐたり春の昼
花に雨これぞ風雅といふべかり
連翹やあやしなんぞのたまり場に
林道に亀鳴くこゑのしてゐたり

久保東海司

風花や手話の自在に輝る指輪
息づまる程の落花にまだ逢はず
田の神の踊り出したる花の宴
雁帰る 明暗綴る 朝刊紙
ジーパンの獅子の脚見ゆ春祭

柳川 晋

難波津に鶴めえのたまごや梅月夜
鶴の夜春の愁ひをむしやむしやと
満開の海より寄する桜鯛
花の奥たかまのはらも根の国も
日本の体温計として櫻

熊川 暁子

春疾風袋小路がもてあます
雲に乗るおたまじやくしを大器とす
その莢は菓神の舟 豌豆剥く
水に水捨つる音しておぼろかな
大辛夷ま昼の空のシャンデリア

寺田 すす子

昼蛙 退屈な時遣り 過ごす
花万朶雨の二日となり にけり
諸葛菜さみしき時は歌うたふ
ゆつくりと時の流れし木瓜の花
なにごとくも潮時のあり花菜漬

岩下芳子

全天の青全山の桜かな
代代を見てゐる杜の槐咲く
海中わたなかの鯉空舞ふ一本釣り
葉桜や大樹の脂のあふれたる
青空の色はね返す犬ふぐり

近藤紀子

明易の夢恐竜に乗りそこね
春水のほとばしりたる掌
花の色を空に放つや犬ふぐり
鐘おぼろ欄干湿る野崎かな
夕桜一切の音封じをる

岩月優美子

犀の背に鴉乗りをる花の昼
白雲やのどかに我が血流れたり
恋ふ人を想へば亀の鳴きにけり
桃の花昨日の鬱の消されゆく
何処より琵琶の音低く月朧

竹中一花

入線の汽笛うららや猫駅長
カピバラと日出づる国の春惜む
黄櫻や童子わっぱ河童と笑ひあふ
釣人のにこにこ万歳櫻東風
春星を沈めて川はゆるやかに

槐市集

中 貞子

霽れて来て新樹の光る門出かな
春日傘大正の影見るととし
はこべらの褒めてやりたき頑張りやう
都忘れの名を教はりし幼かな
宝物館に新樹光の影ゆるる

中 島 昌 子

ご自慢の漬物並ぶ仏生会
戦なきこの国に生れ花見かな
花の雲大和の空を奪ひたる
えんそくの列の見上げる麒麟かな
夜桜や天平美人の舞ひ姿

中 田 禎 子

建て替への社は小さし桜かな
なだらかな山並なりき揚雲雀
花吹雪三十年目の御開帳
ジルコンの輝きの増す花篝
白金の指輪を外す花筵

中 谷 富 子

腹の子はサッカー好きや聖五月
四代の女系家族や豆の飯
十八番鯛のあら煮や母の日に
池の面にしたたる若葉鯉泳ぐ
一生の続いてをりし花は葉に



中林晴雄

ささやかな句会のありし虚子忌かな
春慶の文箱に写る春の塵
掌に乗せて毛玉のごとき仔猫かな
志野焼の灰かな紅や春愁
若さの字苦さに似たり卒業歌

中道愛子

真ん中に卒寿の人や花の宴^祝
粧ひて卒寿の膳に桜鯛
さくらさくら猿の腰掛けみつれたり
白木蓮二重まぶたの母に似て
恋心うちあけられし四月馬鹿

橋本順子

マンガローブの森蟹の高歩き
自転車の人影若し春の月
白雲の果て春光の街現るる
亡き人の句集編みをり蜷の道
青梅雨の森にジュラ紀の音のして

前田美恵子

自覚無き行ひしおらが春
洋館の隠れ家めきて花うばら
桜より人ひと人の通り抜け
水分の落下とどむるすべもなく
人伝に又兵衛桜見に行かむ

安野眞澄

早蕨の黒谷和紙に包まれて
春光の赤牛交じる草千里
木瓜咲くや二人暮らしのおらが春
沈丁花に社の神の眠りをり
初夏や嬰の手足のよく動く

柳橋繁子

公開の御所の白砂松の芯
亀鳴くや太く短き生命線
白山や腓をぬらす芹の水
花蕊に羽音ありけり花御堂
園丁の指さす大島桜かな

槐集

高橋将夫選

大空や燕の後を風が追ふ
大阪 有松 洋子

鏡より春光あふれこぼれ出づ

真夜中の猫は臍を食べてゐる

秘めやかに蝶と女仏の息遣ひ

春潮や地球みごもり胎動す

天界に続く段畑焼きにけり
寢屋川 前田美恵子

春の闇阿修羅の眉間愁ひをる

長閑なる岩塩のほろ苦きかな

釣糸のぐるり取り巻く花筏

春闌くるたばこの煙燻りて

来し方は臍となりぬ余白の美
大阪 江島 照美

齒抜け顔並んでゐるよ入学児

ケとハレの境にありし桜かな

校門に花びらシールそこかしこ

風葬の夢を見てゐる花吹雪

春深む小雨小言のやうに降る
寢屋川 山根 征子

春眠の枕にからむ明けの雨

口あけてすやすよ寝る子燕来る

筍や飯に菜まで今を喰ふ

葉桜や人は水辺を恋ひにけり

花の雲袂に色のありにける
摂津 中田 禎子

吸ひ込んで花いつぱいの六腑かな

夜桜や仮面をつけし人の波

結界を桜としたり明と暗

身ほとりに声の降りくる花明り

剣玉の腰のリズムやうららけし
京都 中林 晴雄

花筏流人の島を離れけり

落椿大地しつかと受け止める

菜の花を分けて電車の迫り来る

転がされ病衣といへど更衣

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

大空や燕の後を風が追ふ 有松 洋子

「燕の後を追う風」から宙を舞ふ燕のスピード感がリアルに伝わってくる。「大空や」の切れ字が景を広げている。

〈鏡より春光あふれこぼれ出づ〉の句では、光が単に写るだけでなく、鏡からこぼれ出るので、〈真夜中の猫は臍を食べてゐる〉はメルヘンと言うべきか、怪談というべきか。〈秘めやかに蝶と女仏の息遣ひ〉の句はいかにも妖艶。〈春潮や地球みごもり胎動す〉の句は季語の「春潮」がよく効いている。

釣糸のぐるり取り巻く花筏 前田美恵子

釣糸を垂れてのんびりと鮎などがかかるのを待っている。気が付けば釣糸の周りに花びらが集まっていた。ゆつたりした時の流れを感じさせる、素朴で美しい精神の風景。

〈天界に続く段畑焼きにけり〉は、「天界に続く」が一句を大きくしている。〈春の闇阿修羅の眉間愁ひをる〉の「阿修羅の眉間の愁ひ」、〈長閑なる岩塩のほろ苦きかな〉の「長閑さとはる苦さ」を捉えた繊細な感覚も作者ならではのもの。

風葬の夢を見てゐる花吹雪 江島 照美

花吹雪を見ていて、ふと風葬の世界を思い浮かべた作者。命も花びらのように風のまにまに消えてゆく。命の賛歌。

〈ケとハレの境にありし桜かな〉の句の「藝と晴れ」、〈来し

方は臍となりぬ余白の美〉の「余白の美」、〈歯抜け顔並んでいゝ入学院〉の「歯抜け」、それぞれに作者ならではの感性と視点がある。

春深む小雨小言のやうに降る 山根 征子

春雨を小言に見立てたところがユニーク。なるほど、春雨も小言もしとしと降る。

〈春眠の枕にからむ明けの雨〉の「枕にからむ雨」の表現、〈葉桜や人は水辺を恋ひにけり〉の着眼は素晴らしい。

花の雲裾に色のありにける 中田 禎子

もとより裾に色などないが、言われてみれば花の山から返ってくる裾は薄桃色のようにだと納得してしまうから不思議。

〈吸ひ込んで花いづばいの六腑かな〉は感性豊か。

落椿大地しつかと受け止める 小林 晴雄

落椿の句はごまんとある。しかし、「大地がしつかりと受け止める」という視点の句は、この句をおいて他になかるう。

〈花筏流人の島を離れけり〉も着眼がおもしろい。

昏るるとき白の極みや花みずき 吉田 順子

なるほど、白昼より黄昏時の方が花水木の白は白いだ。

霾や 古^{いにしへ}人の影のせて 柴田 靖子

霾に見る古人な影に日本の王朝の人々を連想したが、おそろく唐や蒙古といった大陸の人々の影なのだろう。

〈以下略〉